

河口堰と生態系考える

岐阜 シンポ「よみがえれ長良川」



来場者の質問に答える（左から）向井さん、今井さん、山下さん、堀さん＝岐阜市司町のぎふメディアコスモスで

長良川河口堰（三重県桑名市）による川や周辺の生態系の変化を考えるシンポジウム「よみがえれ長良川2020」が十五日、岐阜市司町のぎふメディアコスモスであった。

河口堰の開門調査を訴える団体「よみがえれ長良川実行委員会」の主催。岐阜

大の向井貴彦准教授は講演で「水害を防ぐための工事が環境を配慮せずに行われ、動植物の減少が心配。どつすれば清流の国の名にふさわしくなるのだろうか」と主張した。

ともに環境問題を学ぶ都上市出身の山下凌さん（東京海洋大三年）と桑名市在

住の今井洗貴さん（名城大四年）が、川と関わりの深い若者として登壇。二人は「長良川は魚が豊富だが、家族や知人の話を聞くと、河口堰の影響で減っている」と口をそろえた。山下さんは「川に関心のある若い世代が少ない。過去の川

の状況と現状を比較し、伝えていくことが大切」と話した。

向井さんら三人に、河口堰の建設反対運動に取り組んだ堀敏弘さんを加えた四人によるディスカッションもあり、四人は来場者の質問にも答えた。（藤原啓嗣）

長良川の多様性 理解を

岐阜大准教授、シンポで講演



長良川を取り巻く環境の変化とそこにすむ生物の現状を語る向井貴彦准教授＝岐阜市司町、みんなの森ぎふメディアコスモス

長良川の現状と生態系について理解を深めるシンポジウム「よみがえれ長良川2020」が、岐阜市司町のみんなの森ぎふメディアコスモスで開かれ、約70人が参加した。

三重県桑名市の長良川河口堰の開門調査を求める市民団体など29団体でつくる

実行委員会が主催。岐阜大地域科学部の向井貴彦准教授が「変わりゆく長良川の魚と生物多様性」と題して講演した。

向井准教授は「長良川にはまだ未知の部分が多い」と述べ、近年になって名前が付いた新種の魚もいるなど多様な生物を育む川であることを紹介。一方、郡上市で建設が進む内ヶ谷ダムや木曾川水系連絡導水路事業、水田の減少などで長良川を取り巻く環境は変わりつつあると指摘した。

外来種の問題では、掛斐川でコクチバスが増えている現状に触れ、「コクチバスは流れのある川で繁殖ができ魚をよく食べる。長良川への流入も時間の問題で、釣りの文化にも大きな影響を及ぼすだろう」と警鐘を鳴らした。

講演後、学生や釣り人らを交えたパネルディスカッションなどもあった。

（山田雄大）

「よみがえれ長良川」

岐阜市で15日、長良川河口堰（ぜき）の開門調査の実現をめざしてシンポジウム「よみがえれ長良川2020」が行われ、約80人が参加しました。よみがえれ長良川実行委員会の主催。

岐阜大学の向井貴彦准教授（49）が「変わりゆく長良川の魚と生物多様性」と題して講演。国土強靱（きょうじん）化、鶺鴒（う）飼い・観光優先した河川工事が生態系を

岐阜 生態系破壊の実態を講演

破壊している実態を紹介し、行政は積極的に「生態系復元」の事業化をしなければならぬと訴えました。

シンポジウムには、河口堰の反対運動を知らない世代も登壇。上流の郡上市出身の東京海洋大学3年生は他の河川と比較して長良川の魚類の豊かさを報告。河口の桑名市在住の名城大学4年生は、河口堰とともに育ってきた生い立ちを語りま

した。2人とも河口堰建設前の昔ははるかに豊かだったことを家族や知人から聞いていて、「長良川をもっと良くするために活動していきたい」と語りました。

河口堰の建設反対運動に関わってきた岐阜市の釣り人の堀敏弘さん（68）は、アユの「大量放流」の問題などを指摘しました。

「河口堰閉鎖25年、生物多様性COP10から10年」にふさわしい、世代と流域をつなぐシンポとなりました。

2020.11.19 しんぶん赤旗

2020.11.18 岐阜新聞

2020.11.16 中日新聞